中国革命は何であったか 永井陽之助編『二十-1985.11.00 (世紀の遺産』(文藝春秋

――二十世紀の巨大な陰と陽中国革命は何であったか

(東京外国語大学教授)中 嶋 嶺 雄

――天安門広場よ

ここはいま、プロレタリア階級の赤い後継者たちでいっぱいだ!

(揚槐「幸福を讃える」)

はじめに――ロマンとその代償

まま歴史の一齣を担う命懸けの実生活なのであった。 とのあいだにまだ多くの距離も時間もあったのにたいし、中国においては、革命への参与がその 符を買うごとく「入党」したことによく似ているともいえようが、この場合の「入党」は、革命 民衆にとっては、革命への参与という重大な事柄も、至極簡単な約束事ぐらいのことでしかなか ったのではないか。それはあたかも、戦後の日本において、知識青年の多くが、駅頭で汽車の切 暗間のなかで、帝国主義段階の世界史が生み落した二十世紀的断層の地底に喘いでいた中国

であった。だとすれば、この革命に参与した広範な農民大衆や労働者、兵士たち、つまり中国民 常性なのであり、悪徳地主の打倒、国民党分子の掃蕩、日本軍兵士への狙撃がそのまま革命なの

つまり、中国にとっての革命は、遠い将来のヴィジョンや社会制度であることを禁忌された日

中国革命は何であったか なお、この一連のブロセスにかんして詳しくは、拙編著『中国現代史――壮大な歴史のドラマ――』、有斐閣 に毛沢東時代とくに文化大革命期を経て今日の非毛沢東化と「開放」体制にいたるまでの時期全体を指 す。 初頭の辛亥革命の挫折以来、いくたびかの革命戦争を経て、一九四九年の中華人民共和国の成立を見、さら う手遅れであった。こうして、中国革命の一連のプロセス(ここで中国革命のプロセスとは、二十世紀 なったのだが、革命権力を樹立するという目前の目標のもとでは、そのような負債への無自覚な 化することは不可能だった。そして、「敵」を打倒したことによって、今度は「味方」の側が体制と 負債を蓄積しつつあることには、誰も気づかなかった。あるいは気づいてもそれを表現し、行為 ねばならない。そのような過程の反復が、やがて革命の側の内部に独裁もしくは専制という重大な 命の側に組織化されるのであるから、献身と自己犠牲が当然の前提とされる世界に没入してゆか 出されるのだが、当の中国民衆は、日常性のなかにおいて、それも弾圧やテロの恐怖のなかで革 これを外部の者が観察し、描写するかぎりにおいては、英雄的でロマンチックな行為として映し 指導者によって全面的かつ容易に勁員され得たのである。こうして、中国革命の巨大なエネルギー 革命に参与する中国民衆は、だから、大衆を組織する方法、つまり政治の技術を知り得た全能の 衆にとっては、政治的手段によって多数者の自由を獲得し、そのことによって人間性を解放する いしは黙認がいとも容易に必然化されたのである。その巨大な負の遺産に気づいたときには、 はまたたくまに髙揚した。そして、このような革命行勁は、たとえばエドガー・スノーのように、 のだという近代の革命 (Revolution) に内在したロマンなどは、初めから無縁であったのかもしれ ロマンのないところにはヴィジョンも、また批判も生まれ得ない。こうした状況において

一九八一年、参照)は、ロマンに欠如したその間隙を革命の重い代償によって埋められねばな

述べている鋭い革命認識、「政治的手段によって、貧窮から人類を解放するこころみ ほど、時代 おくれのものはない。これほど不毛で、危険きわまるものはない」との言葉は、まさに中国にこ らないこととなったのである。だとすれば、ハンナ・アーレント女史が名著『革命について』で

そ当てはまるといってよいであろう。

放たれて新しい離陸を開始しようとしているとき、中国の革命に半世紀を賭けたこの国の民衆の 「社会問題」の解決の方法としての革命そのものの不毛と危険を指摘した女史の洞察には 着目 せ に依拠したかたちでの政治的手段による貧窮からの解放のこころみをかなぐりすて、個人のイン 豊かさ(さしあたり一人当りGNPが指標になる)は、 一人当りGNP二五○米ドル前後でしかなく、 制が必然的に内在していたのであり、その中国がいま、ようやく「毛沢東思想」の呪縛から解き ざるを得ない。つまり、中国革命には、経済の著しい停滞と中国流の全体主義=毛沢東家父長体 まり経済的手段による贫窮からの解放を目指している事実を目撃するにつけても、い ち は や く センティヴに基づく経済活性化と対外経済「開放」という、まぎれもない「非政治的 手 段」、つ 日本の約四十分の一だという不名誉をいかにすべきか。これでは、偉大な中国革命が泣くではな 今日の中国が、半世紀有余の中国革命ののちに、〝貧困のユートピア〟を求める「毛沢東思想」

一、中国民衆にとっての中国革命

殷民運動の視察報告」で導き出した重要な結論、「貧殷がなければ革命もあり得ない」とい うテ 人はどうすればよいかを知っている」という表現もある。この言葉は、毛沢東が若き日に「湖南 には、「貧乏人があまりにも貧乏になりすぎ、金持ちがあまりにも金持ちになりすぎる と、貧 乏 民だと見做すことができよう。その股民にとって、土地はまさに「大地 Good Earth」なのであ は中国段民の土地への愛着そして執着がいかに強く深いものであるかを物語ってい る。『大 地』 きたとき、彼の心の病いを癒やし、そこで耐えてきた苦しみを慰めてくれた」というとき、それ った。パール・バック女史が『大地』の主人公・王龍に託して、「大地は、南の都会から 帰って 今日でも人口の約八○パーセントが農村人口だという中国社会において、民衆とはすなわち農

持すれば、やがて土豪劣紳や悪徳地主などの郷紳階級が打倒されたのちに、自分の土地が持てる という希望こそ、革命への参与の最大の勁機であり、多くの段民にとっては、それがすべてであ ーゼにそのまま重なっていった。 こうして、中国革命は段民が主体となって進行したのだが、彼らにとっては、中国共産党を支

初めて現実のものとなったのだが、そのような喜びを嚙みしめるいとまもなく、殷民に与えられ 殷民の希望は、革命後ただちに着手された一九五○年代初頭以来の土地改革によって、有史以来 た土地が三〜四年のうちに合作化 (協同化) という名目のもとで再び段民の手から取り上げられ、

しかし、ここに中国民衆にとっての一つの悲劇の根源があったのである。つまり、このような

集団化されようとしたからである。 当時は、このような農業集団化への抵抗が農民のあいだで根強かったのは当然であろう。たと

求めて革命に参加した中国殷民の広範な意識を反映していたといえよう。 出の殷民・劉介梅は、生まれて初めて手にした土地とその土地が彼に与えてくれる感激を失いた な意識を批判するキャンペーンが起ったために表面に露呈したのであるが、その心理は、土地を くないばかりに、自分がなぜ紅軍に加わったのか、という革命の初心をすっかり忘れてしまった。 周知のように、「毛沢東思想」に導かれた中国革命のもっとも基本的な特徴は、「耕す者に土地 これらの殷民党員の心の屈折は、いずれも彼らが小生産者意識に堕しているとして、そのよう

え革命してどうなるのか」と不平を言い出した。かつて紅軍の模範的な戦士であったやはり貧殷

願の土地を入手したと思ったら、共産党が今度はその土地を集団化しようとしたので、「こ の う

えば、贫農出身の一人の農民共産党員・李四喜は、一九五一年の土地改革によって、ようやく念

盟の理論といっても、レーニンのそれがプロレタリアート主体的であったのにたいして、毛沢東 版一九七一年」、齊木鸖店、参照)。 国論――イデオロギーと政治の内的考察――』 第一章「『毛沢東思想』とマルクス主義」 一九六四年 を」、「農民に土地を」というスローガンによって、土地を農民に等しく分配するというヴィジョ の場合は、あくまでも農民主体的であったといえよう(これらの点について詳しくは、拙著『現代中 ンを広範な段民大衆に与え、彼らを革命の主力軍たらしめたことであった。この点で同じ労股同

社) というプロセスそれ自身が、権力確立以前の約束に違う革命勝利後の重大な背理であった と いわねばならない。このとき股民はまず最初に『裏切られた革命』の悲劇を深刻に体験したので それだけに、殷民に土地を与えたあとの 集 団 化(互助組─→初級合作社─→高級合作社─→人民公

のテキストによって、改めて確認しておこう。 先の農民党員・李四喜が具体的にどのように感じていたのかを、「李四喜心理」

年九月十六日〉 もの、俺は苦しんでばかりいて、土地も無かった。今、俺には土地があり、すっかり満足して いる。このうえ革命を続けるのはなぜだ? 何のためだ?』」(『学習』第四巻第十一号〈一九五一 として家に帰りたがった。幹部が注意すると、彼は怒ってこう叫んだ。 れた。しかし、土地を獲得すると、工作を続けることをいやがり、殷作業だけに身を入れよう 解放後に結婚して子供ができた。土地改革のあいだは彼は積極的で、青年隊支部の書記に選ば 「李四喜は、貧しい日雇の作男で、十年以上も働いたが、いつもひどく困窮していた。 ――『これまでという やっと

れ、革命権力もブロレタリアート独裁ではなく、連合政府による人民民主主義独裁だといわれた よって推進されてきたといえよう。中国革命が人民民主主義革命もしくは新民主主義革命と呼ば のは、このような中国革命の性格を反映していたからにほかならない。 の後の中国社会に内在した緊張と無理の第一の起源があったといわねばなるまい。 だが、中国革命の重大な背理は、土地問題のみにあったのではなかった。 周知のように中国革命は、抗日民族統一戦線を基盤にした広範な諸勢力の連合 (Coalition) に こうした「李四喜心理」をブルジョア的小生産者意識として葬り去ってしまったところに、そ

とより、中国共産党は、革命の中核として存在しつづけたのであるから、やがてブロレタリ

「過渡期」として、社会主義建設ではなく、社会主義改造を実行する時期として位置づけられ て アート独裁下の社会主義政権を志向するのは当然であったにせよ、建国後の一九五四年に制 れた中華人民共和国窓法によっても、少なくとも三つの五カ年計画期間、つまりほぼ十五年間は

力を構成する階級的要素は、労働者階級、農民階級、小ブルジョアジーおよび民族ブルジョアジ 民民主主義独裁という政治構想が合意されたのであった。毛沢東自身、中国革命の最終的勝利を 礎とする人民民主主義国家である」と規定しており、この規定に基づいて「連合政府」による人 目前にした一九四九年七月、有名な「人民民主主義について」のなかで、人民民主主義独裁の権 ーであることを明確に指摘し、いわゆる「四民プロック」を認めていたのであった。 いたのであった。 中華人民共和国憲法第一条は、その国家権力の性格を、「労働者階級が指導し、労農同盟

外部世界においても多大の共感を呼んだのであった。だが、こうした漸進性と多様性を特色とし り開かれるものと期待されたのであり、このような中国革命のあり方は、中国国内のみならず、 このような地平においてこそ、中国革命のユニークな性格が新しい国家建設において大きく切

た革命後社会 (Post Revolution Society) の構想は、次々に投げ棄てられていった。 この点を確認するために、まず中国革命の段階について、要点を見てみよう。 中国革命の過程では、いかに新民主主義革命といっても、やがては中国共産党が権力を支配す

るのではないかという党外人士(この場合、その多くは中国革命の一翼を担った知識人や民主諸党派、 つまり、右に見た規定でいう小ブルジョアジーや民族ブルジョアジーを指す)の不安と勁揺にたいして、

毛沢東はまず一九四一年の段階で、こう述べていた。

的に協力するという共産党のこの原則は勁かすことのできないものであり、永久にかわらないも を独占する権利はないのです。……代表者の皆さん! 同志の皆さん! 党外の人々と民主主義 外の人々にたいして民主主義的に協力する義務があるだけであって、他のものを排斥し、すべて のであります」(「陜西・甘粛・寧夏辺区参議会における演説」、『毛沢東選集』第三巻、北京、人民出版社、 「国事は国家の公けの事柄であり、一党一派の私事ではないのです。だから、共産党員には、党

る。 国共産党の背理が今日にいたるまで、その初期の構想からはあまりにも大きいことを物語ってい 央顧問委員会主任という政治的には第二線のポストのはずの鄧小平氏が牛耳っている現実は、中 「国家の公けの事柄」であるのに、中国共産党の独占どころか、その中国共産党の最高指導 層 の という表現は、それが中国共産党の最高指導者の発言であっただけに、言葉としてまことに美し とえば一九八四年十月一日の建国三十五周年記念の国家的慶祝行事においては、まさに そ れ ったことはいうまでもない。また今日の中国でさえ、非毛沢東化が進捗しているというのに、た いものであった。だが、その後の政治的現実が示すように、それは言葉のうえのことでしかなか **員でもある国家主席(李先念・党中央政治局常務委員)さえこの行事に出番がなく、すべてを党中** このとき毛沢東が示した民主主義の原理、とくに「中国共産党がすべてを独占する権利はない」

の点でも広範な人民各層に希望を与えたといえよう。彼は一九四五年に次のように述べていたの

だが、毛沢東が中国革命の段階で約束した事柄は、より根本的な権力問題にも及んでおり、こ

則的にちがったものである、と」(「連合政府について」、前掲『毛沢東選集』第三巻)。

とられるのではないかと疑っている人々がいる。われわれの答えはこうである。すなわち、いく つかの民主主義的階級が同盟した新民主主義国家とブロレタリアート独裁の社会主義国家とは原

「一部には、共産党が勢力を得ると、ロシアにならって、ブロレタリアートの独裁と一党制度が

こうして背理を積み重ねてきたのであった。 機を深めたとき、毛沢東と中国共産党は、民衆への公約をかなぐりすてて革命の論理を優先させ、 な革命構想であっても、それが革命であるかぎり、中国社会の様々な現実にぶつかって矛盾と危 革命戦術であったとしてのみ指弾することはできないであろう。だが、いかに柔軟かつユニーク 表していることも、そのことを示している。 検閲下で「ブロレタリアート独裁の歴史的経験について」と題する重要論文を二度にわたって発 五六年二月の「スターリン批判」と同年秋のハンガリー事件に際して、中国共産党は、毛沢東の やがて権力確立後には、プロレタリアート独裁が当然の前提として語られるようになった。一九 このような毛沢東政治にとって、中国革命の基本的性格から大きく乖離してゆく重要な転換点 もとより、このような背理は、党外人士や民主諸党派ひいては中国民衆を当初から欺くための こうして毛沢東の権力構想は、当初はあくまでも新民主主義の連合独裁であったといえようが、

東は全国人民代表大会の決定を尻目に、別途招集された中国共産党全国各省・市・区党委員会書

カ年計画が全国人民代表大会(第一期第二回会議)で正式に採択された日の翌日であったが、毛沢

その最初の転換は、一九五五年七月三十一日であった、と私は考える。それは懸案の第一次五

が、すでに五〇年代半ばに存在していた。

まる毛沢東の報告を受けた各級の党書記たちは、全国各地に帰還後、 級合作社化)を挑戦的に呼びかけたのであった。冒頭から「穏歩前進」路線への激しい非 難 で 始 漸進的な農業集団化構想、 つまり「過渡期の総路線」をはるかに上まわる急激な農業集団化 (高 記会議で「農業協同化の問題について」と題する報告をおこない、第一次五カ年計画 を 支 え た ただちに農業集団化にとり

かかっていった。

突発的な転換をはかって党内闘争を大衆運動化してゆくという毛沢東政治の最初の全面的展開をの機関において多数の支持を得られなかったりするときに、党や政府以外の大衆に直接呼びかけ、 の最初の躓きの石がここにあったのであった。 許す機会となったのである。やがて文化大革命において頂点に達する毛沢東政治の恣意的な展開 れたのである。だが、このときの転換こそ、自己の政策が大衆的合意を得られなかったり、 こうして一九五五年後半からは、急激な農業集団化が熱烈な大衆運動として中国全土で展開さ

して展開され、党中央はしきりに「言者無罪」(何を言っても罪にならない)のスローガンを強調し かけて、「人民内部の矛盾を正しく処理」するために「百花斉放・百家争鳴」運動が大衆運 勁 と 内部の矛盾」というユニークな発想に暫時立ち戻った。こうして中国では一九五七年五~六月に そのような時期に「スターリン批判」とポーランド=ハンガリー動乱に直面した毛沢東は「人民 こうした転換は、中国革命の公約からの背理として、中国社会内部に抵抗や緊張を生んだが、

中国共産党への痛烈な批判が起るや、一九五七年六月八日を期して、この運動は一転、「反 社 会 しかし、「百花斉放・百家争鳴」運動が一斉に花開き (May Blossoms)、予想だに し なかっ

て、中国共産党への批判さえ積極的に呼びかけるのである。

主義の毒草」を一掃するための反右派闘争へと急遽転換していった。まもなく民主諸党派の政治 128

家や知識人、さらに丁玲女史らの著名な党員作家など、中国共産党への批判や抵抗を示した者は

すべて「社会主義の毒草」「右派分子」として葬られていった。

文字通り中国共産党の一党独裁体制を強化し、社会主義社会における複数政党の存在という、中 華人民共和国建国当初のユニークな原則(建国の理念)は完全に形骸化していったのである。 は中国革命を支えた民族統一戦線の論理からの完全な訣別を意味したのであり、これ以後中国は、 転換であった。民主諸党派人士や党内外の知識人たちへの中国共産党の対応という点でも、それ この第二の転換は、中華人民共和国の、そして中国革命の全体的なプロセスにおける決定的な

ぎなくされた毛沢東の苛立ちと復簪の意欲とをひたすらかきたてたのであった。かくして一九六 闘争を深刻化させた。半面、「大躍進」政策の失敗によって政治の第一線から後退すること を よ 政策へと突き進んでいった。そして、「大躍進」政策の挫折は、毛沢東の政治政任となって 党 内 こうした背理ののちに、中国は翌一九五八年の総路線・人民公社・「大躍進」という三面紅旗

今日、中国では文化大革命の悲劇があまねく語られている。あるいはまたその悲惨のゆえに誰

〇年前半の経済調整期を経た六〇年代後半、文化大革命の幕は切って落された。

文化大革命とは、では一体何であったのか。

思想」の絶対化は、毛沢東家父長体制のもとで、中国社会の内在的発展をあらゆる分野で押し殺 動化という毛沢東政治の極限的形態であった。そして、『貧困のユートピア』を求めた「毛 沢 東 よって全中国社会を熱狂的にとらえたかに思われた文化大革命は、政治的には党内闘争の大衆運 もが当時を忘れたがっているともいえよう。かつて、「毛沢東思 想」の 教 化 (indoctrination) に

CHARLE OF PRINTS AND ADDRESS.

Î

中国革命は何であったか

月十六日。北京=荒井特派員電による)。 てさえ、*文革期十年間に死者は二千万人にものほり、何らかの被害を蒙った者は六億にも 達 し た』という内戦さながらの犠牲をもたらしたのであった(これらの数字は『読売新聞』|九八|年十 してしまったばかりか、社会的亀裂と緊張をいたるところに生みだし、中国共産党の見解によっ

主義の起源』、参照)、文革期の毛沢東中国こそ全体主義であったといわねばなるまい。 てすべてが社会化されてゆくプロセスこそが全体主義だとするなら ばへハンナ・アーレント『全体 を知り得た指導者が全能になる。熱狂的な毛沢東崇拝が生じたのは、このためでもある。こうし 偖、一九七一年>参照)。このような状況においては、大衆の情緒をかきたて、大衆を組織する方法 にこそあったといえ よう(この点については、永井陽之助「政治的人間」、『柔檘造社会と暴力』〈中公叢 的領域』と『公的領域』の分裂」「私生活そのものの戦争化」といった状況が全社会に 現出 し、 されていたアメリカの若い中国研究者のあいだで冷笑されたことを想い起す)、社会生活に お ける「『私 オロギー》にかんするセミナーで、当時の中国を Garrison State だと規定したところ、毛沢東主義に鼓吹 Garrison State」と呼んだ。一九七一年七月、アメリカのサンタフェで開かれた『現代中国の政 治 と イ デ 舞台装置によって、当時の中国社会は一種の戦時 勁 員 体 制 と な り (私は当時、それを「兵営国家 ではない。「毛沢東思想」の絶対的な教化と、そのようなカリスマ的な雰囲気を醸成するた め の ハンナ・アーレント女史のいう「社会的なるもの」が中国社会において極小化されてしまった点 だが、文化大革命が悲劇であったのは、それが武闘や迫害による大量の死をもたらした点だけ

会であった。私はそれを「すきま」社会だと定義づけているが (さしあたり、この点をめぐる私とい

だが、中国社会は、本来、「社会的なるもの」がいたるところに広がり、存在してきた伝 統

たのであった。いわば儲教的世界であるよりは、この「すきま」社会としての道教的世界こそが、 この「すきま」の部分で中国の殷民や民衆は生活の知恵を十二分に活かしてしたたかに生きてき いだもも氏、小田実氏との論争、小田実座談会「今、毛沢東を語る」、『話の特集』一九八五年七月号、参照)、

によって「すきま」を埋めつくそうとしたところに、毛沢東の敗北の原因があり、文革の悲惨が 中国社会の本質だともいえるのである。こうした中国社会を全面的に押しつぶし、「毛沢東思想」 あったといわねばならない。 このようなブロセスを経て、今日の中国は「毛沢東思想」の呪縛からようやく脱しはじめてい

れようとしているのではないか。だとすれば、二重の意味で中国革命は、中国民衆にとって大い なる虚妄であったということになるではないか。 るのだが、その「すきま」は『貧困のユートピア』から一転して『向銭看 (拝金主義)』で埋 め ら

二、マルクス主義にとっての中国革命

身もかつて検討したことがあり、私にとっては中国研究への一つの原点でもあったのだが、マル 大月書店版『レーニン全集』第一九巻)だと見做すなら、 ヘーゲル哲学も、イギリス古典派経済学も、 会主義」という三つの源流が融合した果実(レーニン「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」、 クス主義をレーニンが規定したように、「一九世紀のドイツ哲学、イギリス経済学、フランス 社 「毛沢東思想」は、果たしてマルクス主義なのか? やや挑発的なこの設問にかんしては、私自

ルクス主義の(レーニン=)スターリン的形態としてのみ継承されたのだといえよう(これらの点に 民運動の体験に基づく中国革命のための戦略・戦術論として摂取されたのであり、思想的にはマ ていない毛沢東において、マルクス主義はもっぱら実践のためのスローガンとして受容され、農 フランスの合理主義思想も視野になく、また、その思想形成期に『資本論』第一巻さえも通過し

舞されて、当初はマルクス主義の民族化の見本として、やがてはその現代的な最高の発展形態と して称揚された。 ついて詳しくは、前掲拙著『現代中国論』第一章「『毛沢東思想』とマルクス主義」、参照)。 このような「毛沢東思想」は、だが中国においては、中国革命の勝利という実践にもっぱら鼓

党規約で、「毛沢東思想は、帝国主義が全面的崩壊に向い、社会主義が全世界的勝利に向う 時 代 て」〉)と規定され、やがて文化大革命を経た一九六九年四月の中国共産党九全大会では、新 ものであり、マルクス主義の民族化のすぐれた典型である」(劉少奇「党規約改正報告」ヘ「党につい まの時代の植民地、半植民地、半封建国家の民族・民主革命において、いっそう発展させられた のマルクス・レーニン主義である」(九全大会党規約「総網」)と定義づけられたのであった。 「毛沢東思想」は、今日でも形成的には現行の中華人民共和国窟法(一九八二年十一月制定) 第 すなわち、一九四五年七月の中国共産党七全大会では、「毛沢東思想は、マルクス主 義が、

条を貫く建国の理念に掲げられてはいるが、もとより、今日の中国社会全体における非毛沢東化

によって、もはや「毛沢東思想」は、殆んど意味を失ってしまっている。だとすれば、「(レーニ

中国革命は何であったか ン=)スターリン的形態のマルクス主義」としての「毛沢東思想」が消えたあとに、 初期マルク スに始まるマルクス主義の思想が蘇えるのであろうか。そのようなことはあり得ないであろう。

まさに「毛沢東思想」は、中国革命の実践に結びついていただけに、「毛沢東思想」をぬき に し 132

ならなかったのであるが、中国革命の過程では、そのようなことは不可能であった し、「毛 沢東 それだけに、中国革命を導いた「毛沢東思想」のあり様が、その出発点において検討されねば

てマルクス主義を考えることは、中国ではあり得ないことだといえよう。

思想」への批判者は、やがてことごとく革命陣営からはじき出されてしまったのである. そのような人物の一人として、『中国 の ト ロツキ ー』と目される彭述之(一八九五~一九八三)

当時の中国共産党の理論誌『新青年』に「誰が中国国民革命の指導者か?」と題する、中国革命 なぜなら、五・四運動期に北京知識人の一人であった彭述之は、中国革命の当初(一九二四年)、

に注目することは、この場合、重要な意味をもっている。

出発期における綱領的論文を発表して注目を集め、翌一九二五年から一九二七年という中国革命

局常務委員、宣伝部長兼機関紙『嚮導』週報編集長として、陳独秀、張国燾、瞿秋白、蔡和森らと たという意味で、中国革命における『ジョージ・オーウェル的時代』ともいえよう)党中央政治 にとっての決定的に重要な時期に(革命と反革命ばかりか、革命陣営内部に粛清や褒切りが続い

Cadart, Cheng Yingxiang, Mémoires de Peng Shuzhi: L'Envol du communisme en Chine, Paris: は、毛沢東をはるかに凌ぐ理論家だったからである(彭述之については、その回想録として、Claude 党中央で革命を指導したというその経歴ばかりか、少なくともマルクス主義の受容 とい う 点で

Gallimard, 1983. 著作選として、中嶋嶺雄編訳『失われた中国革命』〈新評論、一九八〇年〉がある)。

たコミンテルンと当時の党中央の指導の挫折ともいえよう――を目撃したのちの一九二九年、当 その彭述之は、一九二七年四月の上海クーデターによる革命の敗北――それは国共合作を求め 『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』に見られる「矛盾→解決」的発想からし ても 十一・二期合刊)に載った論文「北京政変と商人」では、中国国民革命の指導勢力をブルジョア商 をさらに大きく引き離していったといえよう。 な暴動革命として進展してゆく方向を決定づけたが、このことは中国革命とマルクス主義の距離 **農民暴動の実態に触れて急速に『革命化』してゆくプロセスは、そのまま中国革命が農民主体的** れまで、きわめて初歩的なマルクス主義認識にあった毛沢東が生まれ故郷の湖南省の殷民運動・ 彭述之の厳しい評価によって、その前半のみしか『嚮導』週報に発表されなかったのである。そ の出発点となった毛沢東の有名な 論 文「湖南殷民運動の視察報告」(『毛沢東選集』 第一巻所収) は、 人などに求めるという幼稚な発想に立脚していたのであり、それだけに、毛沢東型農民革命理論 主義認識は、当時まったくの問題外であった。現に毛沢東は、一九二四年の『嚮 導』週 報 より正統的に受け容れようとしたのであった。その彭述之の立場からすれば、毛沢東のマルクス ミンテルンが指導した国共合作に激しく抵抗し、マルクス主義の原理的な立場を中国においても おけるプロレタリアートの指導性を一貫して主張するとともに、スターリン、ブハーリンらのコ 民主化、 共和国成立以後は海外亡命を余儀なくされ、一九八二年にアメリカで客死するまで、革命中国 て陳独秀とともに中国トロツキズム運動の『危険な道』を歩むこととなったのである。中華人民 時の中国においてさえ,禁断の書。であったトロツキーの中国革命論に接して深く共感、 だが、「毛沢東思想」は、『実践論』や『矛盾論』に見られる陰陽二元論的思考か ら つまり社会主義下の「政治革命」に大きな期待をかけていたのだが、彼は、中国革命に

一元的

(これらの点については前掲拙著『現代中国論』第二章「中国的イデオロギーの形成要因」、参照)、

惟的風土においては、たとえば彭述之のように、余程マルクス主義の原理に理論的にも忠実であ な止揚の契機を重視するマルクス主義とは原理的にも根本的に乖離したものであった。 一元論を特徴とするマルクス主義は、陰陽論をはじめとする二元論の歴史的土壌をもつ中国の思

ろうとするのでないかぎり、そもそも適合しがたいのだといえよう。 このような中国においてマルクス主義は、その思想的文脈においてではなく、革命の戦略、

果し、中越戦争まで招来したことは、マルクス主義が思想や理論としてはともかく、実践的には 革命ののちに、その影響下に生じたインドシナ革命がヴェトナムやカンポジアの悲劇と混乱を結 あまりに大きい経済的な立ちおくれをもたらしているという事実は、実践としてのマルクス主義 負の逍産を残し、しかも革命を経過しなかった中国周辺の同じ儒教文化圀諸国 (地域) と比べても、 術としてもっぱら受容され、展開されてきたのであった。 ても豊かな果実を証明し得なかったマルクス主義の思想や理論は、もはや社会経済史の一断章で がいかに不毛であるかをわれわれの同時代史に深く刻印してしまったことになる。加えて、中国 いかに不毛な結果を生んでいるかの証明にほかならない。そして一世紀有半にも及ぶ実践によっ それだけに、中国革命の結実としての社会主義建設が、すでに見たように中国社会に数多くの

地社会にまで波及したのだが、このような外延的広がりにもかかわらず、 洋的専制とアジア的停滞の舞台・中国に東漸、さらに四半世紀を経て、東南アジア熱帯の旧植民 革命をもたらし、それから四半世紀のちにはマルクス自身もその射程に考えたこともなかった東 こうしてヨーロッパに生まれたマルクス主義は、まずヨーロッパの辺境ロシアに開花 マルクス主義による革

しかあり得ないのである。

という展望さえ提示している。 (フィリピンにその可能性をわずかに残すとはいえ)、 もはやアジアには起り得ないのでは

ないか

発展につながるのだという新しい時代が、すでに東欧の社会主義国やソ連邦の一部に見られるよ 度はマルクス主義からの離脱、すなわち「脱社会主義」の方向こそが歴史の進歩であり、社会の いずれにせよ、十九世紀の思想としてのマルクス主義は、二十世紀の実践を経て、やがて二十一 |紀にはいよいよ死滅してゆくものと思われる。 しかも、問題はそのような局面にとどまらず、社会主義社会もそれが成熟すればするほど、 ョーロッパからロシアへ、そして中国へ、東南アジアへと進んでゆくのではなかろうか。

、日本知識人にとっての中国革命

がうまくいかなければアジアがうまくいかないからである」(傍点、引用者)「何人にとっても重大な意味をもつのである。中國がうまくいけばアジアがうまくいくし、中國中國人こそは自立の民である。このことだけからも、中國人が何を為し中國人に何が起るかが中國人こそは自立の民である。アジアには他に自立の民といえるものがほとんどない中に、み、そのまた半分は中國人である。アジアには他に自立の民といえるものがほとんどない中に、な面でその中でももっとも重要な國となるであろう。世界中の人間のおよそ半分はアジアに住な面でその中でももっとも重要な國となるであろう。世界中の人間のおよそ半分はアジアに住 中 一國は今日の世界でもっとも重要な國々の一つであるが、おそらく次の百年間ではいろいろ

歴史――』、岩波新街、一九五〇年)の冒頭部分である。 その小史(China:a Short History, 1947)』(邦訳、平野袋太郎監修、小川修訳『中国――民族と土地と 右の引用は、第二次大戦後のわが国で広く読まれたオーウェン・ラティモア夫妻の著『中国―

の小著をエリノア夫人との共著のかたちで刊行したのは、一九四七年、つまり中華人民共和国成 ラティモアが『近代中国の形成 (The Making of Modern China, 1944)』の改訂版 として、こ

立二年前であった。

じめ一貫して対日ハード・ピース論者として立ちあらわれたアメリカ内部の「中国派」ラティモ アの面目躍如といったところであろう。それにしても「中国がうまくいけばアジアがうまくいく」 の唯一の自立民族として称えているあたりは、戦後の占領政策をめぐっても、天皇制の廃止をは この引用部分に見られる中国観は、『中国絶対化史観』とでもいうべきもので、中国をア ジァ

諸国は、中国大陸の混乱をよそにして今日の新興工業諸国 (NICs) への道を切り開いたことか がうまくいかなかった一九六○年代後半から七○年代前半にかけての十年間、アジアの中国周辺 とか「中国がうまくいかなければアジアがうまくいかない」といった表現は、文化大革命で中国

中国認識こそ、戦後の日本知識人をとらえた一つの世界観であり、一九五〇年代のわが国のジャ を打ち建てるに及んで、さらに熱気を帯びてわが国知識人に迎えられた。ここに示されたような しかし、右の引用に見られる一種のアジテーションは、やがて中国が革命に成功し、新生中国 ラティモアの歴史観がいかに非現実的なものであったかが窺えよう。

ーナリズムは、ラティモアをはじめマクマホン・ボール、アンドルー・ロスなどの革命待望型な いしは革命的ナショナリズム礼賛型のアジア・中国認識に全面的に依拠し、このような世界観を

絶対的な基調として多くの知識人に発言させてきたといっても過言ではない。

した知識人のなかで、もっとも強い影響力をもったのは竹内好氏であった。 このような知的土壌において、中国革命を担った中国共産党とその指導者・ 毛沢東を高く評価

革命家としての毛沢東像を氏一流の熱っぽいコクのある文章でロマンチックに描きあげたのであ 風運動に見られるモラリズムをきわめて高く評価しつつ、一貫してヒューマニズムの立場に立つ 成を見ていたといえようが、氏は毛沢東の根拠地革命の意識に見られるラディカリズムや延安整 魯迅の紹介者としても知られる竹内氏は、毛沢東のなかに、魯迅精神の革命的発揚と実践的達

は、氏をはじめ日本の代表的な知識人(当時のいわゆる「進歩的文化人」)の多くが嫌った 日 本 にじみ出ている。 章に慣れた目には、毛澤東の文章はいかにも生き生きして見える。かれの文章にはかれの人格が 郎共著『スターリン・毛澤東・ネール』、要替長、 民主主義的であり、柔軟であるかを説くことによって、"人間・毛沢東" とスターリン主義 の ソ の官許マルクス主義者の教条主義的発想に比べて、毛沢東がいかに人間的であり、 中国の民衆感情を代弁する上に立っての個性である」「かれの人間性に残虐を立証する要素 は 一 つもない」「かれは一貫して民主主義の実現を目標にしている」と述べていた。つまり、 たとえば、 竹内氏は、氏の認識の原型を示した初期の論文「毛澤東」(猪木正道・竹内好・蠑山芳 **論理の厳密さを保ちながら、発想法はまったく個性的だ。しかもその個** 九五一年)において、「日本のマルクス主義者の文 個性的であり、 性は、

連共産党とは違うヒューマンな中国共産党というイメージを広くわが国の知識人やジャーナリズ

に植え付けたのであった。

の「解説」〈中央公論社、一九六九年〉、参照)、当時は毛沢東伝執筇の動機として、こう述べていた。 者として、わが国で最初に毛沢東伝を手がけた京都大学の貝塚茂樹氏にも、そのような毛沢東像 て、マルクス・レーニン主義が中国民族の伝統的な思想、とくにヒューマニズムとの結びつきに 加えているが(『中国の伝統と現代』〈中公新街、一九七三年〉および『世界の名著4——孫文・毛沢 東』 が反映していた。貝塚氏は、文化大革命を目撃したのちに初期の理想主義的毛沢東像に、訂正を ――「中国革命の勝利は、もちろんマルクス・レーニン主義の勝利であるが、それだけではなく

うな結びつきを明らかにしたいと企図したのである」(『毛沢東伝』〈岩波新哲、一九五六年〉)。 ここに見られるように、竹内氏や貝塚氏のような非マルクス主義の立場の知識人ほど、毛沢東

よる勝利でもあった。わたくしは毛沢東の伝記において、かれの思想と、行動を通じて、そのよ

やがうえにも理想化されていったといわねばならない。 クス・レーニン主義を批判しようとさえしたのであったから、毛沢東像は、わが国において、い のなかにマルクス・レーニン主義を超えたヒューマニズムを見出すことによって、通俗的なマル

人のあいだでも一挙に失われていったとき、毛沢東と中国共産党がスターリン主義的な弊害を整 やハンガリー事件に際してソ連軍が二度も軍事介入してソ連共産党への信頼感が日本の左翼知識 て暗黒のソ連政治・社会が衝撃的に暴露され、非スターリン化の過程で勃発したポーランド動乱 そのようなとき、 一九五六年二月のソ連共産党二十回大会における「スターリン批判」が起っ

風運動によって独自的に克服してきたことを示すと同時に、一九五七年には「人民内部の矛盾」 という毛沢東の独自の発想を提示したことは、わが国知識人をさらに毛沢東と中国共産党の側に

こうした毛沢東イメージがわが国の知的土壌に根強く存在したからであろうが、専門の中国学

国社会を毛沢東政治の桎梏に陥らせる重大なステップであったが、この実験はソ連社会主義もな 傾斜させた。翌一九五八年夏の人民公社の出現は、「大躍進」政策の挫折に見られたよ うに、

し得ない壮挙として受けとめられた。 やがて中ソ論争の発生は、多くの知識人を戸惑わせたが、わが国知識人のあいだでのフルシチ

識人と毛沢東」、参照)。 の知識層と文化大革命」および拙著『文明の再鋳造を目ざす中国』〈筑摩鸖房、一九八四年〉所収「日本の知 大革命と日本知識人に関しては、さしあたり、拙著『北京烈烈 (下)』〈筑摩唐房、一九八一年〉終章『日本 陶酔させたともいえようが、この点については、ここで改めて述べるまでもないであろ う (文化 めの序曲でもあったのである。それほどまでに文化大革命は、多くの知識人やジャーナリズムを フの不人気に比べて、毛沢東はなお偉大であった。 こうした雰囲気は、やがて開幕した文化大革命への日本知識人の称賛の一大パノラマ形成のた

ズムについて、「わが国の多くの知識人は、 ナチと違ってコミュニストのもつ禁欲的性 格、 といえよう。そしてこの点こそ、永井陽之助氏がその師、デヴィド・リースマン教授のリベラリ 共産党や日本共産党への失望を中国共産党への期待で代替しようとした傾向がきわめて強かった 理想

ここに見たように、わが国の知識人には、みずからの革命願望の挫折を中国に託したり、ソ連

『政治について』)ような偽善と同様に、スターリン主義のソ連を暗黒の社会だとみなすくせに、毛 を一つの脅威とみなすくせに、ポルシェヴィキは一つのホープだと主張 する」 (ハンナ・アレント コミュニズムをナチよりはるかに危険であると見る」と述べている論点と重なってい る。 「ナチ

主義、純粋性のゆえに、これに同情を示す傾きがあるが、リースマンは、その禁欲性のゆえに、

沢東主義の中国は理想郷だと主張する見方が、わが国にはきわめて根強かったのである。

であった。松本氏は、雑誌『世界』(昭和二十四年八月号)の中国特集「中国の現状をどう 見 るか 立直前の時点でいちはやく問題点を鋭く指摘していた一人の若い学徒にして夭折した松本善海氏 このような中国認識のなかでのきわめて数少ない例外は、一九四九年夏、まさに新生中国の成

来るに違いないと。かくして『中共』なることばは、インテリのユートピアにまで髙められる」 ちには、……その希望を中国の変革にかける。やがてわれわれの救いは、解放せられた中国より ってエッセイを寄せ、「現実の日本の情勢に敗戦後の希望をうち砕かれた思いのする人たち の う ――シナ学者のこたえ」に仁井田陞、吉川幸次郎、貝塚茂樹の各氏といった中国学の泰斗にまじ

国革命の歴史的意義が中国社会の現実の姿とともに萎んでゆく過程と同様の道をみずからもたど 識人とくに「進歩的文化人」は二十世紀の世界史を揺り勁かした中国革命に翻弄され、やがて中 ったのであった。 だが、松本氏のような冷静な立場は、一貫して少数派なのであった。かくして、戦後日本の知

と述べていた。

おわりに――二十世紀にとって中国とは

能であろう。ナチス・ドイツが二十世紀前半の世界史を揺り動かした最大の力であったとしたら、 二十世紀もあと十五年という現在、この世紀をいかに総括するかについては、様々な見方が可 中国革命は何であったか

う国際政治の産物だったといっても過言ではない。そうした間隙を縫って、毛沢東、そして今日 利、その後半は共産中国をめぐる国際政治が同時代史の一つの中心となり、朝鮮戦争、そしてウ ェトナム戦争とアジアを舞台に二度も熱戦が生じたことも、結局は中国にどう対応すべきかとい といえるかもしれない。その前半は、中国の目党めと革命そして日本の中国侵略と中国革命の勝 の鄧小平は、世界中をひっかきまわしてきたのであった。 二十世紀全体を通じて、つねに問題を投げかけ、現代史の焦点でありつづけたのは、革命中国だ

言している。『日本経済新聞』一九八五年五月二十九日付、参照)さえあるのは、一体なぜなのか の約百七十カ国の国々のなかで百五十一位だという評価(馬洪・中国社会科学院院長自身も、 人当りの経済的豊かさの指標は、つまり一人当りGNP約二五○米ドルとあまりにも低く、 なといえようが、それにしても、これほどまでに全世界を揺り動かしてきた中国自身が今日、 このように見るならば、先のオーウェン・ラティモアの大言壮語のような中国観もむべなるか

境から人びとを解放した革命はなかった」というハンナ・アーレント女史の洞察(『革命について』 れをとってしまったのである。この点でも「これまでの革命で『社会問題』を解決し、欠乏の苦 界を震撼させはしたけれど、みずからの社会を豊かに向上させることには、あまりにも大きな遅

まりにも果実に乏しいものであったと結論せざるを得ない。つまり、中国は二十世紀において世

結局、中国革命の結果としての中華人民共和国という社会主義中国の実験が社会経済的に

はあ

第二章「社会問題」)が正しいことを、中国革命もまた立証したといえよう。 これからの中国が人口問題や政治的不安定などの諸要因のために、もしも当面の「四つの現代

化」という国家目標を達成し得ずに二十一世紀を迎えるとしたら、十数億という巨大な人口を擁

国大陸民衆の現行の一人当りGNPをすでに大きく引き離してしまっている(一九八四年末現在で、 する中国それ自身が、人類に残された最大の南北問題だということにもなりかねないであろう。 このような状況をまえにして、同じ中国人社会の台湾(中華民国)、香港、 シンガポールは、

略々台湾三○○○米ドル、香港およびシンガポール五○○○米ドル)。

国際的孤立のなかにあって奇跡的だといわざるを得ない。だとすれば、もしも中国が中国共産党 の勝利による社会主義国家への道ではなく、国民党政権であったならという仮定や、当初の建国 香港やシンガポールは貿易都市国家であるので、一応捨象するにしても、台湾の発展は、

sight〉の錯誤」だと語っているが、このような見方は、中国にも当てはまるのかもしれない。 が唯一の正しくかつ必然的な選択であったと説くこと自体が歴史家の陥りやすい「後知恵〈hind· ーの『ソヴェト史』第一巻を書評した際に、ロシア国民にとって、ボルシェヴィズムへの道のみ 助氏がしばしば引用するように、イギリスの碩学サー・アイザィア・パーリンは、かつてE・H・カ の理念に基づく連合政府であったならという措定も論理的には成り立つのではないか。永井陽之

義建設の恐るべき負の遺産よりは少ない犠牲において中国大陸をなんとか支えたのではないか、 政治権力が中国の救済と建設を十分に成し得たとは思わないけれど、少なくとも毛沢東型社会主 とは考え得る。 もとより私は、当時の国民党の政治能力や連合政府の本質的な不安定性からすれば、これらの

革命も戦争も無関係であるか無意味でしかなかったかのような膨大な人間群が、今日一日の、そ る理想社会の実現という夢は畢竟、大いなる幻影だったのである。そしていま、中国大陸には、 いずれにせよ、中国は二十世紀をまさに革命と戦争の世紀として経過しながら、中国革命によ

版ではないのか。 して明日一日の利得を求めて犇めき、盎めきあっている。これは、革命前の近代中国の姿の現代して明日一日の利得を求めて犇めき、これ